

二度目の大阪万博、愛知万博の教訓から学べ

名古屋から大阪に転居して6年近くになる。当時、大阪では万博誘致に向けた動きが話題になっていた。名古屋にいた頃、誘致から開催後まで愛知万博をウォッチしてきたので、大阪万博誘致の動きにも関心があった。愛知万博の教訓を伝えようと、何回か講演したこともあったが、大阪市民の関心は高くなかった。IR カジノについては反対の声が聞こえたが、万博は話題にするのを避けているようであった。1970年大阪万博にあつい「思い」があるのか、私のように万博を批判的に論ずるのは少数だった。2018年11月に2025年大阪万博開催が決まり、それから5年近く。あの熱狂はどこにいったのか。万博への関心は高まらず、開催準備の遅れから延期や中止の声が相次ぐようになった。2018年12月『東海ジャーナリスト』113号に寄稿した拙稿を紹介する。

11月23日深夜、2025年国際博覧会（万博）の日本・大阪開催が決まった。1970年に続いて2度目の大阪万博だ。喜びにわく姿を見ていて、21年半前のあの時を思い起こした。1997年6月13日、ギャンブルで有名なモナコで2005年愛知万博が決まった。その日の毎日新聞朝刊に「巨額財政負担、全く疑問」と題した私のコメントが載った。「誘致が決定しムード的に他の大規模プロジェクトも同じ方向で、押し切るように流されていくことに懸念をもつ」と。大阪万博でも、まずは同じ懸念を表明しておきたい。

愛知万博には構想段階から開催後まで、足もとからウォッチしてきた。昨年末に大阪に転居したので、再び万博と付き合うことに。

大阪のメディアは当初、「お祝いムード」一色だったが、課題山積と伝えるようになった。中日新聞を定期的にチェックしているが、11月27日社説「大阪万博 愛・地球博も参考に」で気になる指摘があった。愛知万博は環境保護団体の反対運動をバックに、BIE（博覧会国際事務局）の警告と白熱した議論で主会場が変更され、里山「海上の森」が保全された。社説で「今度の万博では、会場の問題はほぼなかろう」と述べているが、それが大問題なのである。

大阪万博の会場予定地は、大阪湾の人工島「夢洲」。コンテナ埠頭として活用され、産業廃棄物などで埋め立て中だ。今年の台風21号でも被害にあったが、南海トラフ巨大地震も危惧され、万博会場として防災面で大きなリスクを抱える。さらに問題なのは、夢洲に万博とカジノがセットで計画されていることだ。

「いのち輝く未来社会」をテーマに掲げる万博が、ギャンブル依存症と隣り合わせとは、ブラックユーモアのようだ。

大阪万博はこのままでは、愛知万博以上に迷走するであろう。愛知万博は開催決定から3年半後に会場が抜本的に変更され、なんとか開催にこぎつけた。大阪万博は愛知万博の会場変更の教訓から、しっかりと学ぶべきである。今からでも遅くはない。

(2023年10月8日)